

28年度 氷見市教育総合センターだより 第5報

「ひみっ子の夢と希望」きらめき推進事業

【11月10日実施】

《講演会 開催》

演 題 「“夢”は“人づくり”」

講 師 元ハンドボール競技オリンピック選手 西山 清 氏



今年、リオデジャネイロオリンピック・パラリンピックが開催されました。2020年には東京での開催が決まっており、気運が高まっています。そこで今年度の「きらめき推進事業」は、氷見市出身のオリンピック選手である西山清氏を招いて、講演会を行いました。

西山氏は、将来に向かって進むべき方向を明確にするために、目標や自分でやってみたいこと（例えば、「〇〇選手のようにになりたい」「〇〇ができるようになりたい」「〇〇には、絶対に負けない」など）をもつことが大切であると、子供たちに繰り返し話されました。

また、西山氏は、夢や希望に向かって進むためには、4つの“人づくり”が必要であると話され、①自分づくり、②チームワークづくり、③ライバルづくり、④パートナー（バックアップ）づくりを示されました。そして、その一つ一つの“人づくり”について、自らの体験談や著名人の言葉を織り交ぜながら、自分自身をしっかりと見つめることや、周りの人々との関わりにも目を向けること、感謝の気持ちを大切にすることについて熱く語られました。

中学2年生は、「14歳の挑戦」を体験し、社会の一員として、将来の自分の姿や生き方を考え始めています。この時期に、ハンドボール界の大先輩の生き方や考え方に触れたことで、生徒たちは、これまでの自分を振り返り、これからの目標や夢を抱いたり、将来へ向けて強く決意したりすることができたようです。

<講師プロフィール>

氷見市熊無出身。

西部中学校からハンドボールを始め、氷見高校に進学。元全日本の主将である金原至氏の指導のもと、インターハイで連続準優勝。3年生のときには、青森国体で優勝。筑波大学に進学後も3年連続で関東学生リーグ得点王、さらに世界学生選手権でも得点王。

大学卒業後は日新製鋼に入社。日本ハンドボールリーグで、3度の得点王に輝くなど、通算709得点を残した。全日本のメンバーとしても活躍し、日本代表として98試合に出場。

ロサンゼルスオリンピック・ソウルオリンピックと、2大会連続で出場。

将来の自分の姿や生き方を考え始めた生徒たちの思いは・・・

<講演を聴いての生徒の作文より> 一部抜粋

今日の講演を聴いて、自分を信じるのが、心を強くし、自分の力を発揮するための支えになるのではないかと思います。

いつもコーチがおっしゃるように、ミスすることを恐れず、前に攻めて、技を思いっきり出すことで、(剣道の)一本を取れるのではないかと思います。 (南部中学校)

今回の講演では、今までの私の考えが変わるような言葉がありました。それは、「夢は変えてもよい」ということです。夢に向かって頑張っても、いつどんなことがあるか分かりません。そんなときは、今回学んだように、自分の状態に合った夢を考えていきたいです。

(南部中学校)

<講演を聴いての生徒の作文より> 一部抜粋

<p>西山さんが長い間、つらい練習にも耐え、ハンドボールを続けられた理由は、目標を常に設定し、支えてくださる人に日々感謝していたからだということを知りました。</p> <p>スポーツというものは、自分だけの力では絶対に良い結果が出せない、改めて思いました。 (北部中学校)</p>	<p>本当にこのままでいいのか、不安になることもあります。夢があるからこそ頑張ることができるし、できることも増えるということを学び、私も西山さんのように諦めずに、夢をもち続けようと思いました。</p> <p>将来は、立派な看護師になって、多くの人を助けたいです。 (北部中学校)</p>
<p>西山さんからは、「個人競技もチームプレーだ。周りで支えている人がいることを忘れてはいけない」ということを教えていただきました。</p> <p>私の所属する部は、3人と少ないのですが、この仲間がいるからこそ、つらいときは助け合ったり、励まし合ったりできるので、かけがえない存在として、支え合っていきたいです。 (西部中学校)</p>	<p>「ライバルづくり」という言葉が、西山さんの話の中にありました。僕は同じ部のH君の顔を思い浮かべました。彼に負けたくないという気持ちがあるからこそ、つらい練習にも耐えられるのだと感じました。</p> <p>これからも部員同士、切磋琢磨し、チーム全体が強くなればと思います。 (西部中学校)</p>
<p>部活で辛いことがあると、嫌になることがあります。すぐに諦めず、「もう一日！」と根気強く立ち向かっていきたいと思いました。</p> <p>今辛いことから逃げってしまうと、次は必ず苦しいことが待っている。楽な方へ逃げないようにし、目標や夢をいつももち続けたいと思います。 (十三中学校)</p>	<p>自己中心的な態度を取り、自分のことしか考えない人は、周りの人とコミュニケーションが取れなくなると思いました。また、好敵手を指定し、目標をもつことは自分を伸ばすことにつながるということも学びました。</p> <p>自分を強くすることにつながる大事な講演会になりました。 (十三中学校)</p>



<p>西山さんの人生についてお聞きし、とても驚きました。初めからハンドボールをされていたわけではなく、けがが原因で始められたこと、何回も諦めそうになりながら、努力と意志の力で克服し、オリンピックに2回出場されたことです。</p> <p>西山さんのお話は、僕の今の気持ちを後押しし、大変励みになりました。 (灘浦中学校)</p>	<p>特に印象に残ったのは、「チームづくり」と「パートナーづくり」のお話です。ブラスバンドでは、一人ではきれいな演奏はできません。みんながいてこそ、様々な音色がハーモニーとなって、人を感動させます。自分のことだけを考えるのではなく、後輩と協力しながら、精一杯取り組むことが大事だと改めて感じました。 (灘浦中学校)</p>
<p>夢や目標を達成しようとしたときに、強い精神力を養うことができるのではないかと、私は考えました。それだけ「夢」がもつ力は強いものであり、だからこそ西山さんは、途中で諦めざるをえなくなっても、違う夢になっても、夢をもち続けてほしいと話しておられたのだと感じました。 (西條中学校)</p>	<p>今まで、将来の夢というのは具体的に決まっていなくて、とにかく現在できることを一生懸命にしようと考えていました。でも、西山さんが、夢をもつことの大切さを教えてくださり、どんな辛いことでも乗り越える勇気となるような夢を見つけていきたいと思いました。 (西條中学校)</p>

第4回 学力向上研修会

【11月24日実施】

～子供が自ら取り組む、5年生「単元確認テスト」のヒントづくり～

県教委が作成した単元確認テスト（5年生）を基に、市学力向上推進委員会では、問題解決につまずいたときに参考となるよう、このテストの裏面に載せるヒントづくりに取り組んでいます。

研修会では最初に趣旨説明を行い、このヒントの精度を上げるために、5年生担任と中学校数学科担当教諭が混合グループになり、子供が自力で解決できるヒントの内容について、真剣に協議しました。



この単元確認テストの有効活用により、一人一人の子供たちに成就感や達成感を

味わわせ、諦めずに問題を解く力や自己評価能力を身に付けさせることができると考えています。

下記は、参加者の感想の一部です。小中学校の教員が問題解決への道筋を互いに考えることによって、よりよい単元確認テストの完成を目指しています。

どこで子供たちが分からなくなるのか、また、何が分かれば問題に向かうことができるのかを協議した。他の先生方の指導方法も聞いて参考になった。算数の中のつながりや積み重ねの大切さを感じた。（小：教諭）

初めて5年生を担当し、算数科の面白さと難しさを感じている。この研修会で、子供たちにどのような手立てを行えば自力解決に結び付くか、多くの示唆を得た。中学校の先生との意見交換は、とても有意義だった。（小：教諭）

グループで協議し、5年生だけでなく4年生や3年生から自己評価能力と問題を解く力を徹底させる必要があると感じた。小学校で育てられた生徒が中学校で輝けるように努力したいと改めて思った。（中：教諭）

第4回 生徒指導研修会

【12月1日実施】

演題 「学級集団づくりに生かすQ-U —児童生徒と集団理解のための活用法—」

講師 奈良教育大学 准教授 粕谷 貴志 先生

研修会の前半では、生徒指導推進委員会より、今年度の取組（Q-U 調査を活用した学級集団づくり）について発表がありました。

後半は、粕谷先生の講演会を開催しました。粕谷先生には、Q-U 調査の結果の見方や活用する方法等について、小中学校での具体例を挙げながら、分かりやすく説明していただきました。

参加者の感想の一部を紹介します。



- ・Q-Uの結果を生かすためには、考察をじっくりと行うことが重要だと感じました。また、担任一人だけで抱え込まずに、たくさんの先生方の目で子供たちを見るのが大切だと思いました。教師同士の関わりや協力も大切だと感じました。Q-Uの結果を活用していきたいと思いました。
- ・一人一人の質問項目の反応を見ることは、子供の心の声に耳を傾けることと同じだと感じました。Q-Uを活用しないのは、子供の頑張りや困り感に、気付いてあげられていないということでもあると思いました。結果を丁寧に見取り、個々や集団への対応をしっかり考えていきたいと思えます。
- ・事例を基に、支援をしていくべき生徒について考えると、自尊感情が低いことや、大人への不信感が高いことなどが見えてきて、分析の仕方がよく分かりました。しかし、そのような生徒たちにどう声をかけていくか悩みます。答えはすぐには見つかりませんが、Q-Uの結果分析から、生徒理解と温かい人間関係づくりを念頭に、試行錯誤したいと思いました。

おすすめ図書の紹介

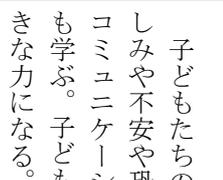
今年度、教育総合センターで購入した図書の一部を紹介します。仕事後の休息時や休日に読んでみてはいかがでしょうか。（この外の図書については、後日紹介します。）

嫌われる勇気

嫌われる勇気
 岸見一郎・古賀史健著 **ダイヤモンド社発行**
 —自己啓発の源流「アドラー」の教え—
 フロイト、ユングと並び「心理学の三大巨頭」と称される、アルフレッド・アドラーの思想を、「青年と哲人の対話篇」という物語形式を用いてまとめた一冊です。



子どもが壊れる家
 草薙厚子著 **文藝春秋発行**
 少年犯罪加害児童の生育歴に、法務省東京少年鑑別所・元法務教官の著者が迫る。共通点は親の過干渉と、予想を上回るゲームの悪影響。子育て不安の時代に、指針となる一冊。



子どもたちの感情を育てる教師のかかわり
 大河原美以著 **明治図書出版発行**
 —見えない「いじめ」とある教室の物語—
 子どもたちのさまざまな問題行動の背景には、いやな気持ち、怒りや悲しみや不安や恐怖・疲労感などのネガティブな感情がある。子どもたちはコミュニケーションの中で豊かな感情をはぐくみ、「感情のコントロール」も学ぶ。子どもたちにとって、自分を理解してくれる教師との出会いは大きな力になる。



怒りをコントロールできない子の理解と援助
 教師と親のかかわり **大河原美以著 金子書房発行**
 どんな問題行動を起こす子どもも、どんなハンディを背負っている子どもも、生きてくるプロセスの中で大人とのかかわりの中で、感情を育てている。いま、子どもの感情を育てるために、私たち大人にできることを考えたい。

お知らせ

平成28年度 教育論文・教育実践記録募集について

日頃の地道な教育実践に基づいた自主的な研修を奨励し、顕彰するとともに、教員相互の資質向上を願って、今年度も皆さんの教育論文・教育実践記録を募集します。奮って応募ください。

(募集要項)

- 1 規格
 - ・ A4判サイズ、本文12ページ以内
 - ・ 字数は40字×40行とし、写真、図、表などを本文に挿入する場合も枠内におさめる
 - ・ 提出は2部（閉じたもの、閉じてないもの各1部）、概要（A4判1枚）2部
- 2 応募締切 平成29年1月10日（火）17：00まで
- 3 提出先 教育総合センター

※ 詳細は、第4回 小・中学校長会議資料をご覧ください。

